

男性・女性としての成熟とは何か

ステファン・ファン・デア・ヴァット

I. はじめに

男性・女性としての成熟について記す前に、まずキリスト者にとって「成熟」とは何かを問う必要がある。もちろん、定義は多岐にわたるだろうが、初めに幅広くそれを探索してみよう。キリスト者である私たちが自分をどう理解しているかは、私たちが神をどう理解しているかと関係している。神についての知識を深めるにつれて自己理解を深め、成熟したキリスト者へと成長する。神は私たちをご自身の良き目的、つまり私たちを成熟させ、御子に似た者にする、という目的に適う者にしてくださると約束してくださっている¹。クリスチャンとして成長することは、神とはどういうお方かを深く知り、聖霊の御わざをとおしてキリストにあって成熟することである。

II. 我々の目標としてのキリストにある成熟²

新約聖書はいろいろな箇所、キリスト者の成熟が求められていると語る。例えば、使徒パウロは成熟を彼の福音宣教の働きの中心的目標として記している。コロサイ書において、パウロは「すべての人がキリストに結ばれて完全な者となるように」努力した³。エフェソ 4 章 13、15 節でも同様に、キリストの体の最終目標について語る時、パウロはこう記す、「ついには、わたしたちは

¹ ロマ 8 : 28-29

² Sinclair B. Ferguson, *Maturity: Growing Up and Going on in the Christian Life* (Edinburgh: Banner of Truth, 2019) 参照。

³ コロ 1 : 28 ; 4 : 12

皆……成熟した人間になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長するのです。……あらゆる面で、頭であるキリストに向かって成長していきます。」続く16節では、信徒一人一人の成熟と教会としての成熟が目指されている。「キリストにより、体全体は、あらゆる節々が補い合うことによってしっかり組み合わせられ、結び合わされて、おのおのの部分は分に応じて働いて体を成長させ、自ら愛によって造り上げられてゆくのです。」だから、クリスチャンの成熟に愛が働く（作用する）のである⁴。

また、ヘブライ人への手紙の無名の著者は、信仰を損なうようなさまざまな圧力に悩むキリスト者に対して「成熟を目指して進みましょう」と話しかける。だから、彼らを励まして勇気づける⁵。新約聖書において「成熟」（形容詞 *τέλειος* と動詞 *τελειόω*）という言葉は、全きことを伝える語群に属する。「完全」や「完成」、欠けるところのない状態、つまり満たされた人生を意味するのである。賜物が完全に発展した人のことでもある。言い換えると、成熟した・多才な人のことを指し、「幼稚性」の対極である。往々にしてそのような成熟はキリスト者として試練を経験することによってある程度もたらされる。ヤコブ（主の兄弟）はこのことを知っていた。「あくまでも忍耐しなさい。そうすれば、完全に申し分なく、何一つ欠けたところのない人になります」⁶。

神の御用をするために、聖霊は私たちに霊的な賜物を与えてくださる⁷。聖霊はまた、私たちがさらにイエスに似た者となるように、霊的な実を結ばせてくださる⁸。イエスは私たちの信仰の創始者でもありまた完成者でもあるのだ⁹。まさに、我らの主はその苦しみにによって完全に成熟したお方である¹⁰。山上の説教で語られた通りである、「だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」¹¹。その前の部分（マタイ5章

⁴ 1 コリ 13：4-5

⁵ ヘブ 6：1-2

⁶ ヤコ 1：4

⁷ ロマ 12：6-8；I コリ 12：1-11

⁸ ガラ 5：22；II コリ 3：18

⁹ ヘブ 12：2

¹⁰ ヘブ 2：10；5：8-9

¹¹ マタ 5：48

17-47節) でイエスは霊的成熟の特徴をこのように語っておられる。成熟した弟子は、

- 御言葉に従うことを愛する（17-20節）
- 恨みや怒りの感情になんとしても打ち勝とうとする（21-26節）
- 人の価値と名誉を守るために肉欲を排除する（27-30節）
- 自分の結婚・家庭生活において忠実に歩む（31-32節）
- 真実に話し、真実に生きる。然りは然り・否は否だ（33-37節）
- 大変な状況の只中、守勢に入らず、賢く仕切り直せる（38-42節）
- 自分の敵のために祈って愛する（43-47節）

私たちも使徒パウロと同じように試練や苦しみにによって徐々に成熟してゆく。パウロは最初から、主の名の故に苦難を耐え忍ばなければならない、と教わった¹²。彼はひたすらキリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら歩んだ。だからパウロは主張する、「わたしたちの中で完全な者はだれでも、このように考えるべきである」¹³。苦難の結果がすべて悪いものとは限らない。苦難は、忍耐と我慢強さを生むことがある¹⁴。それは過度に自己中心的であることから人を解放し、他人のニーズを認識させることができる。また、現在の状況によって作られた様々な境界線を超越することを可能にする、人間としての成熟と意義を高めていくことができる。

これはキリストにある成熟への招きとチャレンジでもある。キリストにある成熟は、男女の別なく等しく与えられるものであり、私たちキリスト者のアイデンティティの中心部を形成する。以上に述べたキリスト者の成熟というものの光の下で、どのように私たちは、特にキリスト者として、このチャレンジと招きを思い巡らすべきだろうか。男性・女性としての成熟とは何であろうか？

¹² 使 9：16

¹³ ペリ 3：10,15

¹⁴ ロマ 5：3-5

Ⅲ. 神の似姿として創造された男と女¹⁵

さて、これから聖書の観点から、まずジェンダー（性差）に関するいくつかの一般的な考え方について話したいと思う。私の目的は、対立的になることでも規範的になることでもない。神の正義とすべての人の尊厳を常に心に留めながら、性とジェンダーについて考えることの必要性をより深く理解することができれば幸いである。イエス・キリストの教会は、公正で思いやりのある信仰共同体である¹⁶。また教会は、男女共に互いに尊敬し合って働くように召されている。

聖書の最初の章の創造物語では、神がご自分の似姿として人を「男と女に創造された」ことを強調している点がとても重要である¹⁷。しかし、歴史を通して、文化やその他の社会的要因のせいで、信者でさえも、この基本的な聖書の真理に矛盾するような考えを持ち、行動するようになった。そうして、人間はジェンダーの不正を支持するような価値観に屈していった。多くの文化の中で男性は、高圧的な態度や生き方で女性を抑圧してきたが、男性たちは往々にして、聖書箇所や教会の教義を引用してそのような行動を（今も）正当化しているのである。

男女関係を見るとき、一部の「証拠聖句」ではなく、聖書全体の「大きな物語」のレンズを通してそれを見なければいけない。従って、創造（創世記）から新しい創造（黙示録）までの聖書の物語と照らし合わせて、人間の尊厳を見ていきたいと思う。キリスト者にとって、人間の尊厳は人間のあらゆる政策、慣習、法令に勝るものであることに注意することが重要である。それは神が生み出されたもので、人間には作り出すことができないものだからである。それゆえ、男性の尊厳も女性の尊厳も、神の統治のご計画に服従して、守られな

¹⁵ Colin Gunton, *The Promise of Trinitarian Theology* (Edinburgh: T&T Clark, 1993), pp.116-117.

¹⁶ Bonnie Miller-McLemore, "How Sexuality and Relationships have Revolutionized Pastoral Theology," in *The Blackwell Reader in Pastoral and Practical Theology*, ed. J. Woodward and S. Pattison (Oxford, UK: Blackwell Publishers, 2000), pp.242.

¹⁷ 創 1 : 26-28

ればならない¹⁸。

神が創造のクライマックスとして、最後に男と女を創造されたとき、「それは極めて良かった」とある¹⁹。エバがアダムのもとに連れていかれたとき、アダムは「ついに、これこそ、わたしの骨の骨、わたしの肉の肉」と言った²⁰。アダムは単に身体構造上の事実を述べたのではなかった。彼はその女性のことを深く感謝していたのである。そして男と女は地上を管理する特権を与えられた。「…そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう」²¹。「神は彼らを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ』」²²。

男女はお互いに、持ちつ持たれつに関係に創られた²³。聖書を見ると、男性と女性の両方が神の似姿に創造されていることは明らかであるが、「男性と女性」というフレーズは大きな違いと区別を表している。神は男性と女性とを別々に創造された。生まれ方自体も違っていた。しかし、この違いは、どちらかが劣っているとか優れているなどとは関係がない。実際、この区別は、交わりと繁殖についての神の計画のために必要なのである。

男性であること・女性であること（男性性・女性性）は神からの賜物であり、大事にされ、尊敬されるべきである。「男と女に創造された」²⁴。自分で性別を選んで生まれて来た人は一人もいない。男性と女性の間大きな違いは、争いのもととしてみなされるよりもむしろ賞賛されるべきである。一つの確実な違いは、肉体的または解剖学的な違いである。昔から、他の違い（心理的、感情

¹⁸ 男女の尊厳については Nico Koopman, "Men and Women in Church and Society: Equal in Dignity? United in Diversity?" in *Living with Dignity: African Perspectives on Gender Equality*, ed. E. Mouton, G. Kapuma, L. Hansen and T. Togom (Stellenbosch: SUN Press, 2015), pp. 19-31, <http://netact.christians.co.za/wp-content/uploads/sites/6/2016/10/Living-with-Dignity-Book-in-PDF-Format.pdf> 参照。

¹⁹ 創 1 : 31

²⁰ 創 2 : 23

²¹ 創 1 : 26

²² 創 1 : 28

²³ I コリ 11 : 11-12

²⁴ 創 1 : 27

的、行動的)も議論されてきた。

女性と男性の違いの意味について私たちが出した結論に関係なく、そして私たちの相違点や類似点からではなく、神の似姿として神が創られた男女の設計に基づいて、人間の尊厳について確認しなければならない²⁵。問題は男性と女性が特定の分野で違っているかどうかではなく、これらの明らかな違いをどのように認識するかである。私たちの主な問題は、ある人を誰かと比べて優れているとか劣っていると評価し分類し、それらの分類に従って人々の価値を決めてしまうことである。私たちは機能と価値とを混同している。性別・ジェンダーにかかわらず、男女が神の栄光と人類の幸福のために果たす役割は、すべて評価されなければならない。

神の似姿は、男性だけ、または女性だけにではなく、両方に与えられている。男女がお互いと団結した時にのみ、それは達成に至るのである。人間性はお互いにとってのプレゼントであり、少なくとも二人の人間の間に交わりがなければ真の人間は存在しない。「私は神の似姿に創られている」と言うことは、「私は自分自身になるためにあなたが必要である」と受け入れることである。三位一体の神の似姿とはこのように、孤立することで現れるものではなく共同体に現れる相関的なものなのである²⁶。文化や社会の中で、男性である自分が主導

²⁵ 神の似姿として創造された男と女に関しては Florence Matsveru and Simon Gillham, "In God's Image: A Biblical Theological Survey of the Dignity of Women and Men," in *Living with Dignity: African perspectives on Gender Equality*, ed. E. Mouton, G. Kapuma, L. Hansen and T. Togom (Stellenbosch: SUN Press, 2015), pp.33-50, <http://netact.christians.co.za/wp-content/uploads/sites/6/2016/10/Living-with-Dignity-Book-in-PDF-Format.pdf> を参照。

²⁶ Jürgen Moltmann, *Experiences in Theology: Ways and Forms of Christian Theology* (Minneapolis: Fortress Press, 2000), pp.284-286 はこの点について次のように表現する、「What 'corresponds' to the creative God as his image on earth is solely a human community in which women and men arrive at their different, feminine or masculine identities, and by way of these identities are there with one another and for one another, and together constitute the resonance of the living God in his earthly creation。」また、Alida Maria Jantina Leene, "Triniteit, Antropologie en Ecclesiologie: Een Kritisch Onderzoek naar Implicaties van de Godsleer voor de Positie van Mannen en Vrouwen in de Kerk" (DTh diss., Stellenbosch University, 2013), <http://hdl.handle.net/10019.1/80176> を参照。そして Paul K. Jewett, *Who*

権を握っているのだ、と教えられて生きてきた人たちもいる。しかし、キリストへの信仰に立ち帰ることは、この「重荷」から解き放たれ、神が男女を神の国に仕える対等なパートナーとして召しておられることの中にある新しい道を学び始めることへと導いてくれる²⁷。こうして、教会にいるすべての人が豊かな実を結ぶことができる。

IV. 今日の性別とジェンダーの用語

誰が教えたわけでもないのに私たちには、「これは男らしい」「これは女らしい」というイメージの共有がある。例えば子どもが転んだ時に「男の子だから泣かない」と言う親はいるだろうし、娘がスカートのまま鉄棒でくるくる回っていたら「女の子なのにはしたくない」とつい言うってしまうことで、「男の子のように活動的であってはならない」というメッセージを発してしまっていることもあるであろう。それは親に限った話ではなく、保育園や幼稚園、小学校などでも多かれ少なかれ言われていることかもしれない。子どもたちは親や学校、友達など周囲を通して男らしさ、女らしさの観念を「常識」として「学んでいっている」のだと思う²⁸。周りの大人からだけでなく、テレビなどのメディアからもジェンダーを学習している²⁹。

We are: our Dignity as Human (Grand Rapids: Eerdmans, 1996), p.29 も参照。

²⁷ Amanda Jackson and Peirong Lin, *Co-Workers and Co-Leaders: Women and Men Partnering for God's Work* (World Evangelical Alliance) (Bonn: Verlag für Kultur und Wissenschaft, 2021), https://www.academia.edu/49084374/Co_workers_and_co_leaders 参照。Patricia Sheerattan-Bisnauth and Philip, V. Peacock (eds.) *Created in God's Image: From Hegemony to Partnership A Church Manual on Men as Partners Promoting Positive Masculinities* (World Communion of Reformed Churches; World Council of Churches) (Switzerland: SRO-Kundig, 2010), http://menengage.org/wp-content/uploads/2014/07/PositiveMasculinitiesGenderManual_0.pdf も参照。

²⁸ 田中俊之、「男らしさ女らしさ、いつの間にか身につける子どもたち 親にできることは」、2021.03.23 <https://globe.asahi.com/article/14289589> を参照。

²⁹ J. Stéphan van der Watt, "Images of Men and Masculinities within Cultural Contexts: A Pastoral Assessment" (DTh diss., Stellenbosch University, 2007), pp.124-190. <http://scholar.sun.ac.za/handle/10019.1/19742> 参照。Dennis Altman, "Sexuality and Globalization," *Agenda* 62 (2004), p.23 も参照。

身体的な性別とは、「男性」や「女性」もしくはその両方の性質を持つ「インターセクシュアル」を指す。「ジェンダー」もまた性別にかかわる言葉であるが、意味合いが異なる³⁰。ジェンダーとは、社会の中で構築された「男らしさ」「女らしさ」を指して、国や民族、文化によって異なることもある。また、文化に根付いたジェンダーであっても、社会の発展、時代に合わせて変化していくケースもある。誰しも「男のくせに女々しいことを言うな」「女なのに気が強くて、男勝りだ」といった言葉を聞いたことがあるであろう。それは本来の性別とは別の「男らしさ」「女らしさ」という概念による決めつけから生まれた言葉である。それがまさにジェンダーなのである。ジェンダーは人間関係において相互的に作られている³¹。

かつての日本では「男は働き、女は家事に専念する」という考えが定着していた。このようなジェンダーによる男女の線引きは、男性が中心となつて社会を動かしていく「男性中心社会」を構築してきたといえる³²。しかし、この男性中心に偏った社会には多くの課題が存在していた。その中でもっとも重大なものは、「女性が持つ可能性を抑圧してきた」という点である。ジェンダー学とは、そのような男性側からの視点や意見を尊重したうえで、男女が平等に自立できる環境づくりを目指す学問でもあるのである。

ジェンダーによって、男女比に大きな差が生じている職業があるのも事実である。このように、「男性ならこうするべき」「女性ならこうするべ

き」と、性別の違いによって進路や趣味を強制、あるいは制限されてしまうことを、「ジェンダートラッキング」と呼ぶ。人種や性別、障害にとらわれず、LGBTQ+などの性的マイノリティなどを含む、すべての人が社会の中で共栄するダイバーシティの実現には、ジェンダーに対する理解が不可欠である。男女間の不平等是正ということはキリスト者にとってもとても大切な課題である³³。

V. 世界的なジェンダーイデオロギーの影響

我々の女性性も男性性も、その固有の形態の構成に含まれる生物学的・遺伝学的因子のみならず、文化、気質、受けた教育、家系、人生経験、友人や家族や尊敬する人からの影響、その他環境適応能力を要する具体的な事情に関連する、様々な要素が交じり合ったものである。故に、我々のジェンダーアイデンティティーは常に変化している³⁴。今日、一般的にジェンダー理論と呼ばれる、多様な形態のイデオロギーから世界規模で生じている課題がある³⁵。

以下は教皇庁教育省『「神は人を男と女に創造された」教育におけるジェン

³³ ジェンダーに基づく差別は世界のどんな場所でも、なんらかの形で存在する。2030年までに達成を目指す「持続可能な開発目標（SDGs）」の目標5「ジェンダー平等を実現しよう」では、こうしたジェンダーの規範や役割、格差をなくし、ジェンダー平等を達成することがうたわれている。特に途上国では、女の子や女性は家事・育児などの家庭での役割を期待され、教育を受けられなかったり、意思決定に参加できなかったり、男性より低賃金だったり、ジェンダーの押しつけは格差を生む。背景にあるのは、「女の子を軽視」「暴力は男らしさ」といった性別に関する伝統的な考えである。こうしたジェンダーの考えから離れ、すべての人が同じ地位や権利を持ち、人生を自分自身で選ぶことができる社会が、「ジェンダー平等」なのである。「ジェンダー平等」の意識がないと、誤った差別や暴力が生まれる。性暴力、性的虐待、セクシュアル・ハラスメントなど、その例は枚挙にいとまがない。だから、誰もが自分らしく生きられる社会の実現のために、ジェンダーに対する正しい理解が必要である。（この注の文章は https://www.plan-international.jp/news/info/20210129_26719/より引用）。

³⁴ Raewyn W. Connell, *Gender* (Cambridge: Polity Press, 2002), pp. 9-10 参照。

³⁵ Sylvia Walby, "Gender Mainstreaming: Productive Tensions in Theory and Practice," *Social Politics: International Studies in Gender, State & Society* 12 (3) (2005), pp. 321-343 参照。

³⁰ ここから数段落の文章は「【ジェンダー学】とは？多様性社会に必要な「男らしさ」「女らしさ」という決めつけからの解放」、2021.07.15 <https://studyu.jp/feature/theme/gender/>からの引用と要約である。Penelope Eckert and Sally McConnell-Ginet, *Language and Gender* (Cambridge: Cambridge University Press, 2003), p. 5 も参照。

³¹ Diane Elam, "Gender or Sex?" in *Gender: Readers in Cultural Criticism*, ed. A. Tripp (New York: Palgrave, 2000), p.169 参照。

³² 「ジェンダーギャップ指数2023」によると、日本は146カ国中、125位である。『世界経済フォーラム』2023年6月、2023.08.25 https://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2023.pdf, p.11 参照。